

『遙拝隊長』の構造と位置

相原和邦

この小説の冒頭は、「こうちが、めげる」という広島弁の言いまわしに対する解釈から始まる。他愛もない土地ことは正面にすえてこれにまともな解析を加えていくところに井伏文学特有の起点と笑いとが早くも顔を覗かせているわけだが、ここではそのことよりむしろ、「平穩無事な日常に破綻を来たす」という、解釈された内容自体に注目したい。ここには、あくまでその名も「大字笹山」という片田舎の「平穩無事な日常」を対象とし、ここに視座をすえながら、しかしその「破綻」すなわち気違いの元軍人岡崎悠一のもたらす「異状」を追求していくこうとする姿勢がある。日常性とそれをこえる非日常との交錯を問題にしよ

うとする企図が明瞭に示されているのである。

とはいえ、作者は、非日常の問題を気負いを持って観念的にとりあげるといふ、よくある型に陥ってはいない。とりわけ前半は、作品世界を平穩な村の日常性の中に浸し切っていて、村人たちと「いま尚ほ戦争が続いてゐると錯覚し」ている悠一との落差が生む笑いがのびやかに描かれている。悠一の病氣の原因については村人たちの推測にしても、南方の戦地での悪疾感染や親ゆずりの悪疾あるいは同輩との喧嘩の結果だというような、どこまでも村の日常を出ない臆説が繰り広げられているのに過ぎないのである。

しかし、作も半ばになると、村人たちのどんな予測をも裏切つて、戦争と密接に結びついたきわめて異常な出来事が真の原因であったという事実が明らかにされてゆく。もちろん、ここでも作者は努めて戦地の日常性の中で把握していくこうとする姿勢を持続しているが、それは、後に詳述するように、背景としての自然の日常が強調されればされるほど戦争する人間の異常さが照らし出されてくるという仕組になっている。もうそこには、村の日常性の中の「異状」をはるかに越えた戦争の「異常」性が如実に印象づけられてくるのである。

作品はさらに、これをもう一度村の日常の中に定着させて結末をつけるという三段階の構成を持っているわけだが、本稿ではその構成をとり外して、主人公悠

一の姿を時間の中でとらえ直す形で作品分析を試み、その後日常と非日常とをからみあわせた構成の持つ意義について考えてみたい。

はじめに、敢えて反映論的な観点からこの作品を追ってみると、悠一は小学校にあがった年に、「過労と貧困による栄養不足」がもとで父を亡くしている。つまり、部落の中でも最下層の出だとされている事実が目が止まる。

女中奉行に出た悠一の「お袋」は、がんびり屋で、家を改造し、入口に「コンクリート造りの膨大な門柱」をたてるまでにごきつける。その門柱を誉め称えた直後に、村長は小学校長と共に悠一のうちを訪ね、幼年学校入学応募生として悠一を推薦する旨を告げ、理由として「悠一が学童として優秀であり、悠一のお袋が人格者であり、模範的な一家である」という戦中の常套文句が添えられる。引き続き叙述の中で作者は、大陸戦争の拡大によって軍関係の学校が「躍起となつて生徒の大量獲得を急いで」おり、村長はいわばその出先機関であつた事実を明確に記している。きわめて精神主義的な徳目を並べた賞讃の裏にあつた実態は、貧窮者の子弟を戦場で消耗する物量と見なして狩り集める戦争の原理にはかならず、門柱によって象徴される意地と見栄とに示されている。悠一のお袋のような庶民のがんばりの志向がきわめて容易に国家と戦争の中へ吸い上げられていく過程がさりげなく描かれているといえるのではなからうか。

それはともあれ、このような経過を経て、幼年学校さらに士官学校を卒業した悠一は、マレーに派遣された後中尉となって小隊の指揮をとることとなる。その戦線の背景の中で、爆弾の落ちた穴に濁り水がたまつて池が出来ている事実を叙した後に、つぎのような光景が描き出されている。

△その濁り池の一つに、水牛が二ひき仲よく浸かつて首だけ現はしてゐた。その片方の水牛の角に、白鷺が一羽とまつてゐるのが見えた。水牛も白鷺も

鳥獸は、工兵部隊の架橋工事をうつとりして眺めてゐる風であつた。V

爆弾で出来た池に水牛がいて、その水牛の角に白鷺までとまっているという叙景は、いささか念が入り過ぎて、こさえものめいたおかしさが感じられないわけではない。『青ヶ島大概記』にも天変地異のさ中に悠然とした姿を現わす牛の描写があつて、ここは井伏得意のくだりであるらしいだけに、一層虚構感がつのるわけだが、それを越えてここには、人間の争いに全くわずらわされぬ平和を悠然と味わっている動物たちの睦まじさを描出することによって作者の無言の批判が示されているとは受け取れないだろうか。これらの鳥獸が、工兵部隊の架橋工事を「うつとりして眺めてゐる」という結びには、ユーモアに形を借りた皮肉さを感じられる。

対比されるのは動物ばかりではない。少し後には「あれを見い。マレー人が、わしや羨ましい。国家がないばつかりに、戦争なんか他所ごとぢや。のうのうとして、ムクゲの木を刈つとる」という一兵卒の言葉が明確に提示されている。敵味方に分かれて抗争し、「自然」に爆弾の穴をあける民族の愚かしさが、「國家」と結びつけてはっきりと批判されているのである。

悠久の自然と一体化したこのような動物やマレー人の描写があるだけに、この二つの場面の間に挟まれている日本人同士、それも部隊内の争いの矮少さと悲惨さが目に立ってくる。すなわち、爆弾池の数多さを見て「警澤なものぢやのう、戦争ちふものは」と思わず洩らした友村上等兵の失言に端を発し、岡村悠一小隊長が彼を平手打ちしている最中にトラックが動いたはずみで二人が川へ転落、友村上等兵は行方不明、悠一は重傷を負うという異常事態がたちまちのうちに発生する。戦争は敵を殺し自然を破壊するだけでなく、味方の中に敵をつくり、些細なことで日本人同士が傷つけ合うという戦争の内在化がここにとらえられているといえよう。

作者がここで、主人公で小隊長の悠一よりも、のろまの友村上等兵の方に先ず目を注いで、次のように記している事実にも注目したい。

「故障車から転落する巻き添へまで喰らつた。おまけに、頭をコンクリートに打ちつけて、名前も知れぬ濁り川に沈められ、散々な仕打ちを受けてゐる。」

「まるで何かの運命を、瞬時の間に縮尺して見せてくれたやつなものである。戦争は警澤どころの騒ぎでない。V

「運命」は、『山椒魚』以来一貫して交らぬ井伏文学の主題である。しかし、ここにはこれまでの傾向と違って、その「運命」を甘受しておれぬという苛立ちがある。そこから、「戦争は警澤どころの騒ぎでない」という吐き棄てるような怒りの言葉が生じている。これは恐らく、作家の地声であろう。国家なきマレー人のしあわせを作中人物に明言させていた先の作者の姿勢と併せて、感情のこもった地声をこれほどあからさまにぶつけ、正面切つての戦争批判をよりのけた作品は、この作者としては珍らしい。作者自身も体験した太平洋戦争という素材の重さもさることながら、ここに作者がこの作品に賭けている激しさが看取できるように思われる。

このような作者の姿勢は、全体として悲劇の主人公の位置にあるはずの悠一も決して甘やかさばかりせず、糾弾の筆を志れてはいない。悠一が友村上等兵にすがりついて彼を道連れにしていって過程を包まず描写すると同時に、一兵卒の口から友村の奇禍の責任の七割は隊長の悠一にあることを指摘させている。さらに、悠一の病因となつた事情を語り明かした上田元曹長は、最後に、自分がトラックの運転兵として敵罰に処せられたことを告げ「みんな通洋居士の行きすぎが原因だよ。兵隊はむごいことだらけぢやないか」と言い、遣洋隊長に対していまでも「むらむらと湧きあがる憎悪」をはっきり口にしている。「兵隊はむごい」という認識といい、今なお消しがたい憎悪といい、これらが先の戦争批判の叙述や口吻と照応していることをみると、作者の批判と憎悪とは、「滅私奉公の権化」としての悠一その人にも向けられていると言わねばならぬ。悠一が被害者である側面については後述する通りだが、同時に彼は歴然たる加害者としてもとらえられ、まずは、その面が前面に押し出されているのである。

戦後派作家たちがこぞって戦争批判に筆を向けたのはいうまでもないが、その作家たちの作品では、野間宏の『真空地帯』、梅崎春生の『楳島』、大岡昇平の『野火』などの例に代表されているように、いずれも主人公に身を寄せ、主人公を被害者としてかばって描く傾向が強く、そこに追求の甘さや戦争批判の不徹底という一面が残っていないわけではない。これに対して、幾分遅れて発表された井伏のこの作品で、被害者である者が加害者であるという交錯の中でとらえられ

ている確かさには注目を払っておく必要がある。

二

とはいえ、先にふれたように、悠一は憎むべき加害者として指弾されるばかりでなく、被害者としての悲劇がとらえられている。しかも、彼が被害者たる所以は、半ば無自覚のうちに戦場に狩り出されたとか、そこで狂信的なまでの忠誠を尽くしている間に負傷したというような外面的・一般的な意味にのみ関わっているわけではない。また、戦時中の肉体的負傷だけが発狂の直接原因であるわけでもない。

事実として、戦時中は、退役してきた悠一が「滅私奉行の精神を鼓吹する訓辞」をしても「当時は、誰も悠一の言動を滑稽だと云はなかつた」のである。これには、もとより当時の情勢の反映もあるが、それだけではなく、悠一の発狂がまだ顕在化していなかったからである。この点については、「尤も戦争中は手当も充分にあつたので、親子で内職の傘張りなどしなくても、悠一のうちは暮らした向きに困らなかつた。そのころは、悠一の発作もそんなにまだ目立たなかつた」という明確な叙述もある。ここで、生活背景と精神状況との関連が示され、しかも、戦時中には悠一の精神がまだ追い込まれていないことが指適されている。事實は、注目に値する。この前提に立つならば、彼を発狂へ直接に追いやつたのは戦時中の肉体的負傷であるよりも、むしろ、敗戦の混乱と戦後の生活の窮迫であり、いわば「敗戦」と「戦後」に他ならぬ、ということになる。

この意味で、作者が、悠一に「足部負傷」と「頭部負傷」という象徴的な二つの傷を与え、しかも頭部の外傷が「内科的疾患に交質して」いく過程を描いている押さえ方はさすがに周到である。一兵卒をして「頭の打撲傷を、痴呆症といふ病気に、すり換へられたわけぢや」と言わせているが、戦争中の外傷が明瞭な精神病に「すり換へられ」るのは、敗戦を経過したうえでのことなのである。

しかも、なお、注意深く発狂の過程をたどると、つぎの一節が見逃せないものとして浮き上がってくる。

八様子が怪しまれ出して来るやうになつたのは、敗戦が近づいてからであつた。完全に気違ひの発作症状を見せたのは、敗戦後数日たつてからであつた。

Ⅴ

敗戦を挟んで、きわめて短かい期間に精神錯乱が強くなり、完全な発狂の発作は敗戦後数日のうちということになると、先にあげた「生活の窮迫」という背景も、決定的な原因としては除外しなければならなくなってくる。外的生活条件が、戦後数日で急変するとは考えられないからだ。だとするならば、発狂のもつとも決定的な契機は、外部ではなく、悠一の内面にあることになる。驚くべきことに、悠一は、敗戦の接近を予感し、敗戦の意味をつかみ、敗戦による精神的衝撃そのものによって自己を改変させられたことになる。逆にいえば、半気違ひの悠一の中には、敗戦の接近と意味とをわきまえ、敗戦によって、まともな衝撃を受けるだけの確かな精神が厳として存在していたことになる。

臆断をはばからずに言えば、悠一の発狂は、敗戦という事実と戦後の現実を見ないための自己幽閉の衝動から出たものではないだろうか。軍国主義から民主主義へと先を争って「転向して」いく正常人たちを目のあたりにして、彼のみは、自己の精神を自ら扼殺することによって軍国主義に対する精神的殉死を遂げ、魂の純粋さを保持したのではないだろうか。

サルトルの戯曲『アルトナの幽閉者』には、第二次大戦の責任をとって自らを幽閉し続けているドイツ人フランクの狂気と誠実とが描かれている。悠一の場合、方向は異なるけれども、やはり一つの責任のとり方であり、一種の自己処罰とも読取れるのではないだろうか。少なくとも、一斉に戦後の転向を遂げていった「正常人」たちにはない誠実さを狂気の悠一が貫き続けている事実のみは、明瞭に確認できよう。

話が少し先走り過ぎたが、こういう見方は単なる筆者の思いつきではない。悠一をとりまく周囲の人々の反応を追っていくと、彼の独自の位置が一層明らかになってくる。

平穏な戦後の村の日常の中で、悠一に対する人々の反応は自ら二つに分かれてくる。一つは、村に外部から訪れて来る人達のそれで、戦後間もなくやって来て、発作の起つた悠一の言動に「わけを問ひただしもしないで這たのていで逃げた行つた」二人の青年がその皮切りである。「軍隊用語に何か威力のやうなものでも感じて怖ぢけたものと思はれる」という叙述があるように、このときはまだ軍国主義の残影が人々の胸中に惰性的に生きていたわけである。

ところが、「ごく最近」になると、炭の買出しに来た町の一青年は、悠一の発

作におしげづくどころか、彼に正面から反抗し、「軍国主義の亡霊」だと批判を加える。「フアッシュ」の遺物「侵略主義」「非武装国」といったことを次々と吐き出すこの青年は、一見いかにも進歩的な民主主義者であるかに見える。しかし、この「兵隊服の青年」が倒れている悠一を「バンドでもつてひつぱたかう」とするとき、たちまちその底が割れてくる。この青年は口先だけの民主主義者に過ぎず、その実体は倒れた弱者を「武」でもって威圧する「フアッシュ」的人物以外の何者でもないわけである。彼は、また後から村人に抱き止められると、「おい放せ、村松棟次郎さん。この危急存在のとき、わしの自由を村松棟次郎さんは、奪ふのか」ということを吐く。思わず吹き出さずにはおれないセリフだが、「危急存亡」という戦時中の常用語と「自由」という戦後の価値との結合には、軍国主義と民主主義の野合の実態が暴露されている。

加えて、「時流に投じた言辭」を諷されるのは、この青年のみではない。悠一の負傷の事情と軍国主義への「憎悪」を語り、作者の主張の一翼を担わされていた上田元曹長ですらも、与十によってその「ソ連風の云ひまわしかた」を擲擧されている。さらに、その与十はまた「封建時代の残滓であると同時に宗教的に画一された姿を持つ墓に詣るのは、彼の主義に反する」という主張を村人から柔らくたしなめられているのである。

上田も与十も、いわば外部の風を吸って来たものであり、その外部はそろって連である。先の兵隊服の青年から、この上田や与十につながるタイプの人間の位置づけを辿るとき、その底流には、当時の左翼的進歩主義者の浮き上りに対する、よき保守主義者としての作者の反撥と諷刺があると言わねばならぬ。そして、昨向までの被害者意識を裏返して、いわば居直った形で、日本の「封建主義」を「軍国主義」を一方向的に糾弾していった戦後の左翼的潮流に対する批判と、悠一をさめて鈍いものがここに籠められていると言わねばならぬ。

悠一に対する反応の他の一つは、このような外部的な者たちとは違った、内部の村人たちの対応である。

村人たちは遠慮から「悠一のお袋が辞退するにもかかわらず」、陸軍病院へ悠一を入院を願ひ出に行つてやっている。悠一を擲擧したままにしておくと、母一

る。発作を起こしている悠一を似非民主主義者の青年がひっぱたこうとした時も、この青年に買った炭をかえずと脅されてさえ悠一をかばったばかりか、この青年とは対照的に「中尉殿、さあ、敵前迂回作戦であります」と悠一の立場に合わせたことばをどきどきに吐いて悠一を内側から動かしている。与十を連れた墓参の折にも、悠一の命令のままに整列して汚ない饅頭を口に押し込まれても、我慢している。村人たちの生活の知恵と思いやりがあふれているのである。

悠一の加害者の側面のみを見てこれに「憎悪」を向けた進歩主義者たちに対し、この村人たちは彼の被害者としての立場を無言のうちに感得し、これを憐れみかばっているわけである。どんな進歩主義者よりも、村人たちの反応に分があり、厚味があるとして描いている作者の位置づけが興味深い。

三

それでは、伝統的な日常性に根ざしたこの村人たちは絶対なのだろうか。そうではない。読み様によっては、この村人たちの立場もまた相対化されてくる事実

に注意しなくてはならない。

相対化の一つの要素は、村人と進歩主義者とのとり合わせにある。すべての宗教を否定するという与十に対して、村人たちは、「郷に入れば郷に従ふぢや」「興十さんは、彼地の郷に入り郷に従つたから、自分の郷に帰つて郷に従へんわけがなからう。」と口々に言う。これが確かに浅薄な進歩主義者に対する批判として利いており、村人の厚味ある生活の知恵であるのは先に確かめた通りである。しかし、この「郷に入れば郷に従ふ」という民衆の精神構造こそが、戦時中には軍国主義をはびこらせ、戦後にはまた似非民主主義を助長した当の基盤ではなかったらうか。そこまで言わなくとも、「兵隊は、むごいことだからぢやないか」という上田元曹長のことば、あるいは「戦争は贅沢どころの騒ぎでない」という作者の叙述は、戦争体験をこれほど簡単には清算できないという憤りから発せられたものではなくあつたらうか。かくて、作者の意図はともかくとして、この作品の深部においては、進歩主義者と村人とは相互に相手否定するものとして存在していると思われる。

相対化という点で、さらに重要な契機は、作中の登場人物全員に対する悠一の特異な位置にある。

彼は、村人から憐まれかばわれるだけの単なる弱者なのではない。村人を含めた普通人にはない強さも持ち合わせている。それを象徴するが、次の一節である。

人彼は、びつこだから歩くのは不得手だが、普通人では登るのに手を焼くやうな傾斜でも割合ひうまく登つて行く。傾斜をおりる場合、普通人なら駐けおりのやうなことになるのに、悠一はゆつくりとおりて行く。V

尋常な平面では普通人に劣つても特異な傾斜ではこれを凌駕する彼の歩行は、日常的観点からすればただの狂者にすぎない悠一が、狭い日常を越えた観点からすれば、普通人の持たない確かさを保持していることの証左ではないだろうか。

作品の結び近くで、饅頭を「恩賜の御菓子」だとして村の四人に遙拝を命じた時、悠一の指す方向は、「空が曇つてゐるが、方角は正確に東を覗つてゐた」と明記されている。発作のさ中にすら、事天皇に関する限り、皇居を指して誤まらぬ確かさが彼の内には生きていたのである。もとより、彼のこいう把握は、当時の民主主義の季節に生きた人々からいえば、狂気であり漫画にすぎなかったのも確かである。しかし、三島事件や、天皇の欧州外遊に対する国内ジャーナリズムの反応に象徴されるように、戦後民主主義の季節が過ぎて、皇国の季節が新しい形で復活しているかにみえる昨今の情勢から見ると、「曇つてゐた」時代思潮などにわずらわされぬこの狂人の感覚こそが、当時のどんな正常人も増して「正確」な方角を「覗つてゐた」ということにはならないだろうか。もちろん、これは結果論であり、当時の悠一が歴史の動きを自覚的に予見する立場にあつたといへば眞實の引倒しも度が過ぎようが、この背後には、民主主義の季節のさ中に、彼に皇国の精神を保持させ続けて、しかも、状況が「曇つてゐた」にも拘わらず、「正確に東を覗つてゐた」彼の姿を明瞭に叙述している作者が敵として存在しているわけであり、これに先にふれた民主主義の浮き上がりの指摘を併せ考えると、ここには、時代の底流に対する作家の本能的な洞察が籠められていたといわざるをえないだろう。

しかし、それでは、悠一は、戦中戦後を通じて変節しない「滅私奉公の権化」としてのみ設定されているのであろうか。

ここで思い起こされるのは、遙拝隊長と恐れられていた戦時中ですら、機会あるごとに「往んでやる」という他愛のない俚謡をうたった彼のもう一つの面であ

る。また、戦後発作が最高頂に達して村人に遙拝の後の「気を付け」を命じた時でさえも、「お菓子の好きな彼は、四人に解散を命ずるのも忘れ、饅頭を頬張つたま咀嚼もしないで、口中のその味覚を舐味してゐる」と叙述されている彼の姿である。ここには、さしもの軍国主義精神も浸蝕できないやわらかな悠一の魂があり、それが幼な心を源泉としてゐる事実が垣間見られる。童謡に代弁されてゐる故郷の自然と結びついた幼な心——やわらかな魂の深部に比すれば、たとえそれがどれほど強固なものであろうと、どれほど持続していようと、軍国精神は仮のものであるに過ぎないのではなからうか。

これに関して、さらに注目を要するのは、「気を付け」を命じたまま饅頭を食べていた悠一をお袋を迎えに来たときのやりとりである。

「……それでは、饅頭を食べながら、うちへ往なうや。のう、わしと一緒に往んでくれ、お願ひぢや。」

お袋は殆んど悠一に嘆願した。悠一は知らぬ顔をしてゐるが、すこしは聞き分け出来たと見え、疲れきつた人のやうに頭をうなだれて歩きだした。V 威圧や抵抗に対しては憤怒の固まりとなる悠一が、母親の「嘆願」に対しては、素直に折れている。しかも、発作が最高頂に達した直後なのに「すこしは聞き分け出来」る分別が働いている。彼は、完全な軍国精神の権化ではなく、一〇パーセントの狂者でもない。臆測をたくましくすれば、彼は戦中戦後を一貫して遙拝隊長を演じながら、他方でそれを仮面劇であり、お芝居だと感じ分ける心をどこかに保持してゐたのではないだろうか。貧窮の母の思いの籠った嘆願は、その隠された心の琴線に痛烈にふれたのではないだろうか。「疲れきつた人のやうに頭をうなだれて歩きだした」という一句に示されている悠一の態度は印象的である。ここに、自分の芝居によって心配を懸け通しの老いた母に対する無意識の懺悔が暗示されていないと言ひ切れようか。

転向に再転向が次ぐ情勢の中に置くと、遙拝隊長を演じ抜く悠一の誠実さと意義については、先にふれた。その彼は、童心と母に対して演技する自己を懺悔するもう一つの心を持ち、存在が真二つに裂かれてゐる。しかも、その裂かれた二つを保持しつつ、分裂を分裂として引き受けつつ生きてゐるところに、更に深い彼の誠実さがある。分裂した軌道の一つを選びその上に乗り上げていった三島由紀夫が現代のドン・キホーテだとするならば、時代の矛盾を背負ひ続ける遙拝

とはいえ、以上のような位置づけは、深読みが過ぎるとして、恐らくは読者の失笑を買うだろう。前節のはじめに「読み様によっては」という限定を加えておいたように、これは筆者の読み取りに過ぎず、作者井伏は、すべてを村の日常性の中に円満に包み込んでいく姿勢をとっている。そして、実のところ、この姿勢に筆者の不満が残るのである。

先に、村人たちもまた上田をはじめとする進歩主義者や主人公修一が存在によって相対化されていると読み得る側面について指摘した。こういう要素を作品の中に投入している作家の直観はさすがである。しかし、こういう相対化の方向について作者はどこまで自覚的なのだろうか。むしろ、作者は、登場人物に下駄を預けて相互批判的言辭を語らせるのみで、作家としての追求に筆を進めず、混在した要素のそれぞれを人間模様として投げ出して見せるに止まつているように思われる。

もとより、そのような観点の設定はそれ自体として非難されるべきものではない。しかし、ここで作者は、そのような複眼的視点を立っているように見えて、その実、相互の立場の徹底的対決をすり抜けて、結局のところ、村人たちの価値観に依拠し、これによって事態を收拾している点に問題があるのだ。

先にあげた与十を墓参に連れ出した例にしても、「与十さんは、彼地の郷に入り郷に従ったから、自分の郷に帰つて郷に従へんわけがなからう。人間の生涯には、素通りせんければならんものが、なんぼでもある。でもよく帰つて来た。みんな心配して待つてをつたよ。さあ、お詣りに行かう」というのが村人の説得の言葉であった。ここに、村人の厚みと暖かみがあると同時に、それは、戦争体験を「素通り」してしまう危険を多分にはらんだ発想でもあった事実については指摘した通りだが、その危険を作者はどれだけ意識的に提示しているだろうか。少くとも、この村人のセリフに続いて、ただちに「さうして与十に墓参の決心をさせた」という地の文を置き、その方向に話を展開させている作者は、この問題を十全の重さで取り上げているかどうか、疑問なしとしない。

結びで、「あの疑りかたまりの滅私奉公が、あんな子供の歌をうたつたら見も

のやねと修一の存在に鋭く迫る言葉を吐いた村人は、すぐそれについて「なるほど、ハツタビユラの池は有名になつたもんなや。結構なもんやね。うん、わしは有名なハツタビユラの池の樋を抜く」という方向へ話を転換していく。作者は、確かにここに滑稽味を意識している。しかし、この「有名」への憧憬こそが修一の母に門柱をこしらえさせ、修一を選擇隊長に押しあげていった当のものであり、あらゆる体験を「素通り」していく村人の体質の表現である事実を、どこまで作者は問いつめているのだろうか。少くとも、それを鋭く刷り出していこうとする姿勢は、ここには見られないのである。

村人をして戦時中に「隣組内に将校が帰つて来ると鼻が高い」と言わせ、戦後にまた「本当に恩賜の菓子を買ふときのやうな気がしたなあ」と言わせている作者は、村人の意識の中にある問題点に恐らく気づいているだろう。進歩主義者や主人公修一が村人たちを逆に相対化する立場にあることを全く把握しなかつたわけでもあるまい。しかし、その方向はつきつめられず、印象づけられるのは、浅薄な進歩主義者たちを相対化し、やわらかな笑いでもってたしなめ取り込んでいく村人たちの日常的な厚みである。主人公修一の扱いにしても、修一が村人を相対化していく彼のイエスの側面はほとんど目立たず、前面に出てくるのは、彼を狂者としてどこまでも憐れみかばっていく村人の温情主義である。結末に近づくほど、温情的な村の日常の中に、修一の姿は完全に没して去る気配さえ見せてくる。

これに関連して、修一の母が手繰る釣瓶繩のエピソードによる締括りにも問題が残る。なるほど、そこには、「耳に突きさすやうな響き」を「鶴の鳴き声」に言い換える見えすいたお世辞で、母の手から修一を奪っていつた戦中の校長と村長の回想が挟まれている。そしてここで、はからずも、「国定教科書」の「美文の一章」が引き合いに出されているように、雑音を「鶴の鳴き声」と言い換えていく意識こそが、兵力狩り集めの実態を模範的な「一家」という徳目で覆う発想そのものであり、それは、国定教科書の美文と軌を一にしているという指摘はわかる。また見えすいたそのお世辞に乗って、「当時、近所ぢゆうに釣瓶の音をきかせるため、必要以上に水汲みをし」という修一の母が置かれていた位置のかなしさもわかる。しかし、ここには、それをかなしと見るよりむしろおかしと見る作者の姿勢が目立ち過ぎてはいまいか。あるいは、かなしく傷ましい修一と母との問

題が十分追求されぬままに、回想による村の滑稽な日常風景の一コマの中にあまりにも容易に彼等の姿がはめ込まれてしまつてはいまいか。

要するに、作品分析の過程で言及してきたように、中途半端な回想などで結ばず、現在の悠一に即し、これを徹底的に追つていけば、村の「平穩無事な日常」をもう一皮深くつき破つて反日常的世界が展開してくる可能性をこの作品は十分に孕んでいるのに、最後の一步手前で追求が差し控えられている。この点に、この作品の重厚さがあると同時に、あき足りなさの感もまた拭えないのである。

五

以上のような不満にも拘わらず、筆者にはこの作品の総体はきわめて重い手ざわりを持って感じられる。その由来を明らかにするには、この作品世界をさらに広い視野の中で見つめ直す必要がある。

事実として、この『遙拝隊長』を歴史状況の中に投げ入れて広く展望していくと実に興味深い問題が数多く提起されてくるのだが、もう紙幅がない。主要な問題のみを、簡条書として手短かにあげておくと、第一に、昭和二年二月、というこの作品の発表時期に注目したい。この年の六月には朝鮮戦争が勃発する。占領政策の転換によってなし崩しに崩されてきた戦後民主主義はここで致命傷を受け、内外ともに軍国主義が復活の萌しを見せはじめる。この決定的な時期に、敢えてこのような戦争批判の作品を上梓したところに、作者の時代感覚の鋭敏さと批判の確かさが読み取れる。

第二は、戦争批判の文学の構造的特質にある。先にふれたように、戦後派文学は、「極限状況」とも呼ばれる非日常的次元に作品を設定して被害者の観点から戦争を糾弾する傾向が強かったために問題追求が徹底せず、また、朝鮮戦争の特需景気によって時代が相対的な安定期に入り、生活の上で日常性が回復されてくると、観念的強い非日常的な彼等の作品では読者をつなぎ取め切れなくなった。その間隙を埋めて昭和二八年以降に登場して来た「第三の新人」たちは、小市民的な日常性の断片をあざやかにすくい取って見せたものの、戦争批判を継承せず、相対的な日常性の背後に潜む社会的危機の追求についても、全体として微弱であった。非日常の文学と日常の文学とのそれぞれの限界に対し、丁度その交替期に位置するこの作品がすでにふれたように非日常性と日常性とを作品

構造の中に交錯させてとらえ得ていることの意義は大きいといわねばならぬ。戦争の異常体験を背負い続けている主人公を村の日常の中でとらえていく視点に、このすぐれた達成の手法的な鍵があるが、そのことはまた、戦後派文学がどちらかといえば外面的な戦争の傷跡を描く傾向が強かったのに対し、戦争の内面的傷痕を追求し、さらにそこから、日常性の中での戦争体験の継承の可能性を切り拓いていくことにもつながってくる。

このことは、第三に、井伏文学の中におけるこの作品の位置にもかわつてくる。この作品より半年前に連載された『本日休診』は、戦後風俗のみに焦点を合わせていることよって通俗化し、風化していく危険を多分にはらんでいく。それは井伏文学が当初から持っていた傾向の一側面の端的なあらわれと見ることができようが、『遙拝隊長』はそこに戦争の異常体験を持ち込むことによつて、作品に緊張を与え、この危機を乗り切っている。やがて井伏は、『黒い雨』をもつて文壇の耳目を集めることになるわけだが、戦後の農村の日常性のさ中に、戦中の原爆という異常体験の問題が芽を吹き出してくる構成、この作者にしては珍らしい地声を感じさせる批判の激しさなど、『黒い雨』を支えている手法のほとんどは、この『遙拝隊長』で先取りされているといつても過言ではない。むしろ、前半の村の日常と後半の原爆の異常の描写に分裂気味の傾きがある『黒い雨』よりも、すべてを村の日常性の中に包み込んで結んでいる『遙拝隊長』の方が、作品の完成度が高いともいえよう。もとより、その点に筆者の不満がなくもないのは先に述べた通りだが、そういう日常的視点を裏返した文学の可能性については、観念的な弱点を感しつつも反日常的世界を展開している安部公房や大江健三郎の文学にこれを求め、強固な日常的基盤を特質とする井伏文学には、これはこれとしての強味を認めるべきであろうか。(一九七二・一一・六)

(注) 東郷克美氏は、八井伏鱒二素描「山椒魚」から「遙拝隊長」へV(日本近代文学)昭四一・一一)において、「まず主人公岡崎悠一が気違いとして書かれていることがもつとも重要だ。このフアナティックな軍国主義者を狂人として書くこと、それにまさる痛烈な諷刺はない。」という見解を提示している。こういう加害者としての主人公を糾弾する側面があるのは先に確かめたところだが、これのみを強調するのは、やはり一面的に過ぎよう。むしろ、これに被害者もしくは後述するような殉教者としての悠一の悲劇を交錯させてとらえていく重層構造の厚みに注目したい。